

ある村の奮闘記

西南戦争における知られざる日々

内田ゆうこ

縁側に腰掛けた婆ちゃんは空豆の殻を指で潰して青々とした豆を出しながら、眠たそうに目をしょぼしょぼしている。側には猫が襟巻きのように丸くなつて眠りかけていた。

「婆ちゃん、ほら、こつくりしていると危ないが」

孫の正一が先刻から何度か注意しているが、婆ちゃんは時々頭をこくつと前に落とす。それでも不思議と空豆の手は止めることなく動かしている。正一が思わず吹き出すと、「うん？」というように婆ちゃんが目を見開いた。正一が自分を見て笑っているのに気付くと、少しばかり照れたように言った。

「ああ、こんげな日はどうも眠とうして。ほんなこつ気持ちがいい日じゃ」

婆ちゃんは孫の顔を見ると続けた。

「ここは日向ひゅうが(現在の宮崎県)じゃ。その名の通り、日が

当たることではどこにも負けん国やつぞ。じゃから、こんげな大きな空豆もできるつちやが」

——だから何ね？——と言いたげな孫を見ながら、婆ちゃんは再び目をしょぼつかせて今にもそのまま閉じそうだった。

明治十(一八七七)年四月、ここ日向国ひゅうがのくにの延岡はその日もお天道様が顔を覗かせ、家の前の、春まき大根の種を植え付けたばかりの畑に恵みの光を与えている。「日向ぼけ」という言葉があるくらい、この地はのどかな風景が続き、人も同じようにのんびりしていた。

その日の夕方のことだった。正一の父親の政夫が妻のおよしに向かつて言った。

「おい、およし、夕飯ゆうめしくつたらすぐ来いっち、あんちゃんから呼ばれちよつとじゃ。ちよいと行ってくつけん」



「あら、なんかあったとじゃろか？」

「うん、変な顔しちよったかり俺も気になっち」

政夫の兄の清吉はこの大貫村の地区一帯の戸長（現在の町長）をしている。

「戸長は誰でもなれるもんじゃないとじゃ。人望だけじゃないとぞ、家柄もようないとなれんとじゃ」

およしがこの家に嫁いで来た時から言い聞かされていたことだった。政夫は次男なので戸長という大変な役についていないことを、およしは密かに幸いに思っている。

それを見透かしたように義母から「およしは、ちゃんと義姉^{あね}さんを助けてやっちくり」と頼まれて、「おつかさん、わかちよります」と思わず頭を下げたのだった。そうしたことから、戸長の妻であるお勝の負担を少しでも除いてあげようと、義母をあざかり一緒に住んでいるのである。末っ子の正一は婆ちゃん子で、よく二人で縁側で猫と遊んでいる。

夕飯の後片付けがすすんでも、政夫は兄の家に行つたまま、なかなか帰って来なかった。

「父ちゃんはまだ帰ってこんと？」

長女のお春が声をかけてきた。

「うん、何か難しいこつでもあったとじゃろか」

先刻からおよしも胸騒ぎを覚えていた。

「俺がちょいと覗いてくる」

珍しく長男の一豊も部屋から出て来ていた。十四歳になつた一豊はいきなり身長も伸び、親も驚くほど遅しくなつた。暗がりか恐くて夜は誰かと一緒にないと外出もできなかった一豊が平気でそういうことを言うようになったのを、およしは母親として頼もしく思った。清吉の家は近いが、それでも畑の中を通っている道は真つ暗である。

「うん、そうしてくれん？」

母親の返事を聞くと一豊は土間に下りて草履をはき、出ようとして折から帰つて来た政夫と鉢合わせた。

「あ、父ちゃん。今俺もおいさんの家に行こうちしよつたと」

政夫はいつになく真剣な顔をしていた。

「みんな起きちよつたか。ちょいと話があるかり集まつてくれ」

お春が不安げにおよしの顔をちらつと見た。およしはいつけない雰囲気を感じて、一豊に向かって「お千代も呼んどいで」と言った。末っ子の正一は遊び疲れて、とつくに婆ちゃんと寝てしまつている。

およし、十八歳になつたお春、十六歳のお千代、一豊が神妙な顔をして政夫の周りに集まつた。政夫の眉間に皺ができているのを見た。

「昨日、あんちゃんここに五福寺の坊さんが来たげな。熊本でえらいこつが起こちよるつち」

政夫の話は実に生々しいものだった。先日のこと五福寺に、ある母親が十七歳の息子を連れてやって来たという。親子は見るからに憔悴しきっており、息子は物も言わず、そんな息子を見ながら母親はオロオロしていたという。話を聞くと、息子は狩りをするのが好きでいつもは父親と一緒に山に出かけていたが、最近では一人でも行くようになったという。徐々に大胆になり山奥まで行くようになった。そうする内に獵の仲間ができ、熊本に住む仲間の家に泊まりがけで行くようになったそう。そして三月二十日、田原坂の近くで今でも夢でうなされるほどの恐ろしい光景を見たという。

「それでな、坊さんが調べたげな。薩摩の西郷隆盛さんが政府に怒つち、立ち上がったこつはみんな知つちよるじやろ。延岡からも大島景保さんを隊長にして何人もの兵が薩軍に加わつちよる。じゃが、西郷さんの軍が熊本城に籠もつた政府軍を落としきらんで、諦めて北に向かいよつたげな。それで田原坂で政府軍と大きな合戦があつち、敵味方どつちともえらいなこつになつたげな」

その日、青年は薩摩の西郷軍と政府軍との凄まじい戦いを眼前で見て、次から次に人が斬られ、鉄砲で撃たれ、傷

を負ったり死にいく様を見た。恐ろしさで齒の根が合わずカチカチと口を震わせながら必死で山を駆け下りたという。目にはあつという間におびたらしい死体が重なるように増えていった光景が焼き付いており、家に帰り着いてからも震えが止まらず、眠れない夜が続いたという。眠つたと思ふと「ぎゃあ」と叫んで飛び起きる息子を心配した母親がお寺に相談に来たという。

これが世に言う西南戦争であった。その年の二月、薩摩の私学校で学んでいた若者たちが、自分たちの物と思つていた武器や弾薬を庫から政府が勝手に運び出したことに激怒した。さらに政府が西郷隆盛暗殺の命令を下したという噂が広がり、政府に対する不満を爆発させた。その頃、陸軍大將まで上り詰めた西郷隆盛は征韓論で意見が対立したことが原因で盟友であった大久保利通らと袂を分かち、鹿児島に戻って来ていた。山村でのんびり狩猟や魚つりをして暮らしていたが、私学校の血気盛んな青年たちや、政府に反感を持つ者たちがそのまま西郷を放つておくはずがなく、ついに薩軍の大將として担ぎ出されたのであった。

西郷のことを若い時から知り尽くしていた同郷の大久保利通は、西郷本人は戦争を起こすことに内心では反対であること、それでもみんなから懇願されれば断り切れなくて先頭に立つだろうと予想していたとされる。諸説あるが、

戦争が始まった直後、政府のために働いていた大久保は、西郷を説得するために単身鹿児島行きを懇願したが、「行けば殺されるぞ」という周囲の者たちの反対に思い断念したという。色々な噂が飛び交う中で真偽のほどは不明だが、すべてにおいて混乱を極めていたその頃は噂も混沌としたものだった。その後、各地から参加して来た将兵たちで西郷軍は約三万人の大軍になった。だが、青年が目撃した田原坂の戦いで多くの兵士が傷ついたり死んでいった。

五福寺に母親に連れられて来た青年は、坊さんが「何も心配することない。亡くなった者たちの魂はこの私が精一杯の供養をする。将兵は志があつち志願した者たちで、ある程度死を覚悟しちよつたじやろう」と話すと、徐々に落ち着いていった一緒にお経をあげて帰つたという。

そこまでの話は恐ろしい話ではあつたが、およしたちにとってはまだ少し他人事であつたかもしれない。

しかし政夫の表情はさらに真剣になり、曇つていった。「この話はここで終わるかと思ちよつたら、続きがあつとじや。噂では政府軍の負傷者は手厚く看護を受け、西郷軍の兵はえらいこつになつちよるげな」

そこで政夫はふうっと息を吐いた。そして声を落とすと、続けた。

「相当の数の怪我人が山を下りて、こつちに向かつちよ

るのを見た者がおるとげな」

およしが驚いたように聞いた。

「もしかしたら、ここら辺にも来るつちことですか？」

お春が、「ええつ」と声を出しながら不安そうに父親を見た。

「うん、あんちゃんの話によると、あと二日もしたら辿り着くじやろつち」

みんなは目を見合わせた。誰の目にも複雑な思いが出ている。

「恐いよ」

次女のお千代がおよしにすり寄つた。およしはお千代の膝に手を当てながら、政夫の次の言葉を待った。

「そんなにはまだ一豊たちと変わらんくらいの子供みないな者もおつとげな」

「まあつ。そんな……」

およしが溜息みたいに呟き、悲しそうな顔をした。

「あんちゃんはその話を聞いて、そんな者たちを助けたいつち、明日、村のもんたちを集めて話し合うこつになつた」子供たちは不安の表情でお互いの顔を見合い、助けを求めようにおよしの顔を見た。

およしは傷兵の中にまだ子供みないな者がいると聞いた瞬間から心は決まっていた。そんな歳の息子たちを戦場に

送った母親たちの気持ちも思ったのである。

——何がなんでも助けちゃる。そして義兄さんと義姉さんの手伝いを精一杯しちゃうが——と奥歯を噛みしめたのであった。この瞬間から、ここ延岡の大貫村の住民の奮闘が始まったのである。

翌朝、およしは朝飯もそこそこに義兄の家を訪れた。お勝のことが気になったのである。

案の定、お勝はおよしを見ると泣きそうな顔をした。

「およしちゃん、大変なこつになったが。私たちにできるっちゃるか。話に聞けば怪我人は二百人位おるつちよ」

「義姉さん、このおよしが一所懸命手伝うけん、一緒に気張ろう。おつかさんからも言われたとよ。傷ついた人たちを無下に扱こうたら戸長さんの家族として名折れになるが」

およしの言葉にお勝は「うん、うん」と頷いた。

その頃の戸長の家は役場を兼ねていたので、その日、村人たちが続々と清吉の家に集まって来た。誰もが村の一大事だと思っていたのである。およしとお勝は下女を手伝わせて茶を出したり、次から次に来る村人たちの世話で家中を走り回った。

「オレは反対じゃ。政府軍が攻めて来たらどうするけ？」

「まこつち、こんげな村に政府軍が来たらひとたまりも

あつたもんじゃねえ。オレも反対じゃ。それにうちは年頃の娘が三人もおるつちやが。娘たちに何かあつたらどうするけ？」

清吉は領きながら、みんなを慰めるように両手を広げた。

「みんなの気持ちはようわかる。じゃけど、西郷さんの本隊は熊本を南に向かって下つちよる。政府軍はそつちに注目しちよるき、負傷者ばかりの集団に軍を送るつちこつは考えられん」

政夫が話を引き取った。

「娘たちは奥の家の三軒に集めて、いつときそこに泊まってもらおう」

村の者たちは最初は反対する者も多かったが、やがて清吉と政夫の提案に徐々に頷いていった。

傷兵たちを一軒につき三人もしくは四人に分けることにした。年頃の娘たちに何かあつてはならないので、三軒の安全な家に集め、洗濯などの後方支援に配置した。子供たちには、川や野原に行きヨモギを沢山取ってくるように命じた。ヨモギは当時、傷の殺菌や止血に欠かせない薬草だった。綺麗に洗って両手で緑色の汁が出るくらい揉み、汁がついたままの葉っぱを傷ついた皮膚にのせると驚くほど早く回復するのだった。ヨモギを見つけたのは簡単で、子供たちはその日の内に大量のヨモギを摘んできた。

傷兵の面倒をみる家庭には米が配られることになった。

大貫は土地が広いことで有名である。その中で清吉の家は代々、広大な土地を有しており、その分、米の収穫量も村では群を抜いていた。蔵に貯蔵していた米を分けてやるつもりであった。

およしは、すぐさま実兄の敬造の元に使いをやった。敬造は長崎で蘭方を学んでいたことがある。医学において延岡では一目おかれていた。事情を聞くと、「できる限り力になるから、いつでも連絡してくれ」と言ってきた。

実は、大貫村にはその四カ月後、もつと大変なことが起こるのである。一旦南下した薩軍の本隊が、逃げ場を求めて現在の宮崎を北上して来たのだ。その折り政府軍から逃げる西郷隆盛本人をかくまうことにもなろうとは、その時は誰も想像だにしなかった。ただ傷兵たちを助けた、こうした細かいことの一つ一つの経験が役に立つのである。統制がとれた「おもてなし」のお陰で、西郷隆盛が真夏の真つ盛りはこの地に九日間も滞在することになるのである。話を戻そう。

山を下りて来ているという多くの傷兵たちの動きを見に行った三人の若者たちの報告によると、もう半日で辿り着くだろうという。

戸長の清吉を先頭に副戸長や数人の村人、それにやはり女性がいた方が傷兵たちも安心するだろうということで、お勝とおよしが同行し、村のはずれまで傷兵たちを迎えに行った。道の両側の畑は菜の花が一面に咲いて、高い空のかなたから雲雀のさえずりが聞こえてくる。およしは思わず上を見上げた。

その時であった。ガラガラという音と、何やら土を踏む大勢らしき靴の音であろうか、聞き慣れない音におよしたちは固唾をのんでその方を見やった。

やがて見えてきたのは、重傷者を乗せているらしい大八車数台を取り囲むように、足を引きずる者、片手を汚い布で肩からつっている者、体全体を風呂敷みたいな布でぐるぐる巻いている者たちだった。みんなの顔は汚れており疲れ果てているようだった。およしは思わず涙ぐんでいた。このような悲惨な光景は生まれてこのかた見たことがなかった。これが人間なのかと、おびただしい数の傷兵たちが魂の抜けたような表情で歩いて来るのを涙ながらに呆然と見た。

「わしがこの村の戸長じゃ。お前さんたちの面倒をみんでみること決めたっちゃ」

同じく感極まったように清吉が声を上げると、驚いたように先頭の者が仲間の兵士たちを振り返った。それぞれの

兵士の年齢は帽子や布でよくわからなかったが、兵士たちの中には母親と同じ歳くらいの女二人が涙ながらに自分たちを見ているのを見て、そのまま泣き出す者がいた。どの顔にも安堵の表情が浮かび、緊張していた体全体の力が抜けていくように座り込む者もいた。

比較的元気で、着ている服もさっぱりしていた者に聞くと、傷が軽く元気な者は近くの川で体を洗ったり、洗濯もしたという。途中の村で食べ物を買ったり、食料の野草や木の実を探す役目も果たしていたという。

「こうなったら、とにかく生きて帰ろう」というのが合い言葉になっていたのだという。

およしの家には、一豊のたつての願いで同じ歳くらいの少年四人をあずかることになった。お春とお千代は娘ばかり集められた家に泊まって、汚い戦闘服を洗濯した。娘の中には嫌がる者もいたが、お春とお千代は母親のおよしのことを思うと、文句を言う気は起こらなかった。

およしは戸長の家で息つく間もないほど動き回っていた。傷兵の人数に応じて各家庭に米を持って行かせた。兵士たち全員の住所と名前を聞いて回り、書き留めた。

医学の心得のある兄の敬造は毎日大貫村まで来て、およしに手伝わせ兵士が泊まっている家を一軒一軒回って傷や病の手当てをした。

傷兵たちの人数は全部で百三十九名いた。他にも大勢いたらしいが、途中で別れたという。

二日後、軽傷で歩ける者は帰郷して行った。同じ志を持ち、生死を共にした者同士でないとわからない何かがあるだろう。お互いの肩を抱き合い、涙にくれ、東西南北に別れて行った。

およしは重傷の兵士たちの家族に手紙を出し、迎えに来てくれるように頼んだ。その頃の郵便事情は、「飛脚」が頼りだった江戸時代からみると、比較にならないくらい良くなっていた。明治四年に前島密（平）によって物流と郵便の制度が始まったのである。およしは一枚一枚、丁寧に書いて出した。

およしの家に滞在した少年四名はそれぞれ傷の具合は違っていたが、婆ちゃんと一豊が手厚く世話をした。若いのでぐんぐん回復していった。食べる量もすごかったので、おそろく栄養も良かったのだろう。

「お前さんの薩摩弁は特にわからんぞ」と一豊にからかわれる少年もいたが、一向に気にする様子もなく、みんな屈託なく徐々に大きな声で笑うようになった。

一人は大分出身であり、十日後にはそちら方面に用事がある者に送ってもらった。あとの三人が鹿児島出身で、一カ月後、一人の少年の父親が迎えに来て、他二人も送って

くれることになった。その頃鹿児島は政府軍の目が厳しくなっていたので、薩軍の生き残りを知れたら大変である。農民の格好をして用心深く帰らねばならなかった。ずっと面倒をみて一緒にいた一豊は、彼らと別れる時、堪えきれずに声をあげて泣いた。それを見た傷兵の父親は一豊の手を取り、何度も何度も頭を下げた。

ようやく大貫村に元のような静かな生活が戻った時には、すでに田植への準備の季節になっていた。慌てて畑地にとりもろこしの苗付けをし、茄子や大豆の種まきも始めた。田植への準備は少し遅れたが、しかし村人の誰もが傷兵を助けて無事に郷里に戻したことを誇りにしていた。そして、そのまま再び穏やかな日々が続くと思っていた。

七月下旬、大貫の側を流れる大瀬川は、涼を求めて水遊びをしたり、泳ぐ子供たちの歓声で賑わっている。高千穂から下ってくる川の水は澄み切っており、冷たかった。

昼は子供たちの騒々しさで邪魔されるので、夜の静寂の中で大人たちは夜釣りを楽しんだ。鮎が釣れるのである。

その日も政夫は近所の釣り仲間の虎三と鮎釣りをしていた。夜風が気持ちいい日だった。

「政夫、お前は戸長さんから何も聞いちよらんか？」
虎三は釣り糸に錘を付けながら呟くように聞いた。

「何のこつか？」

「西郷さんが延岡に来るつち噂があるとじゃが」

「ほんなこつか？」

「うん、二、三日前に西郷軍がこつちに向かつちよるのを見た者がおつとげな。都農では西郷さんを密かに泊めた家もあるつち。ただ本人の姿は見えんかつたそうじゃが」

政府軍と比較して軍備や装備、食べ物、すべてにおいて劣っているとされた薩軍は、熊本で大勢の兵士を失い、意気消沈して南下した。所々で政府軍に押し戻され、その間に先を越されて、鹿児島は政府軍に陣取られた。鹿児島に戻ることままならなくなった薩軍は再び北上するしかなく、宮崎の北部まで移動して来ているという。

「西郷さんは大きな男つちな。横も縦もあるつち聞いたことがある。顔も目もびっくりするくらい大きいとげな」

政夫は言いながら、戸長の兄はまだ何も知らないと思つた。帰ったら早速、兄の家に行つて話しておこうと思つた。西郷隆盛といえど九州内はおろか日本全国でも知らない者はいないくらい有名なお人である。たとえ延岡に来られることがあつても大きな商家とかお寺とか宿泊できる所はいくらでもある。その時の政夫はのんびりとそんなことを思つた。兄の清吉も同じことを思つたようだ。

「もしかしたら兵士の数名は大貫でもあらずからんといか

んかもしれんな」

その夜、兄弟はそんなことを話したのだった。

それは八月二日の夕方のことだった。

「大変だあ！」

清吉の家の戸をドンドンと叩く者がいた。驚いてお勝が戸を開けると、息せき切つて家の中に村人の一人が飛び込んで来た。

「川に船が……船が……」

「何があつたとや」

清吉が部屋から飛び出して来た。

「船が何艘も三須方面からこつち側に渡つち来たたと見たが、どうも西郷軍のごたる。奥もあつた」

噂では西郷さんは輿に乗つて移動していると言われていた。

「まさか……」

清吉は絶句した。

「政夫とおよしを呼んで来い」

下女に告げると、驚いて口をあぐり開けているお勝を見た。

「何が起こつてもしつかりしちよけ」

お勝に向かつて言つたが、自分自身に言い聞かせたもの

でもあつた。

政夫とおよしも慌ててやつて来た。お互い何を話す暇もなく、外が騒々しくなつたと思うと、家の戸が叩かれた。

「すみません、すみません」と声が出た。家の中にいる者はお互いの顔を見合つた。みんな戸惑いの色を隠しきれずにいた。清吉が戸をゆつくりと開けると、数人の兵士たちが立つていた。

「戸長さんの家でごわすか？」

「はい、そうです。清吉の顔は緊張している。

「突然で申し訳なかつた。実は宿を探しまして、一晩泊めてくれんでしょうか？」

「もしかして……」。清吉は唾を飲み込んだ。あとの言葉がどうしても出て来なかつた。

相手は清吉の聞きたいことを察したようで、黙つて、それでも力強く頷いた。

「わかりました。入つちください」

清吉が言うのと、政夫たちは極度の緊張で声も出なかつた。兵士が二人、さつと戻つて行つたと思うと、兵士に担がれた輿が静かに庭に入つて来た。目を見開いているおよしたちの前で、輿から大きな男が這うようにして出て来た。

——これがあの西郷隆盛さんか——

およしは驚きと怖れで思わず深々とお辞儀をした。

「お世話になりもす」

西郷さんはくぐもつた低い声で一言そう言うと、まるで身を隠すように家の中に体を入れた。清吉は輿を持っていた兵士たちに、「輿はあっちの小屋に隠して下さい」と言った。庭にはすでに警戒態勢の兵士が道の方を見て立っていた。

家の中では、お勝が座敷に案内した。西郷さんは巨体がかがめながら、のっそりと座ると、清吉、政夫、お勝とおよしの四人が座るのを待って、改めて拳にした両手を畳につけると律儀に挨拶した。

「突然のこつで申し訳なかこつでござす」

「いいえ、こんげなむさ苦しい所で、こつちこそ申し訳ありません。こつちが妻のお勝で、そつちの二人は弟夫婦です。四人だけでお世話させてもらいますけん、安心しちよつて下さい」

その時、部屋に入って来た男が四人の前に膝をついた。

西郷さんの後ろをいつもピツタリとついていたので、おそらく位の高い軍兵に違いない。

「ほんのこつ急なこつで申し訳なかこつでござす。実は四月にこつで世話になったつちゅう兵士が来まして、こつでの親切が身にしてみたと話しておつて、ほんに世話になりました」と頭を下げた。すると西郷さんも「お世話になり

ました」と頭を下げ、——若い者が多かつたから食べ物も大変だつたでしょう——という意味のことを薩摩弁でおつしやつた。軍兵が頭を下げながら言う。

「そん者が『こなら安心じゃから頼んでみんしやい』と言うもんですけん」

およしは、おそらくそういうことだろうと思つていた。そうでなければ、全く知らないこんな田舎に西郷さんが来るわけがないと思つたのだ。

今ではこうしておられる西郷さんも、若い頃は百姓のことを親身に世話をし、自分のことより他人のことを考える人だからこそ民の間で人気があつたと、およしは聞いたことがある。その人を近くで改めて見ると、目が大きかつた。その目は赤くなつていゝ。

——きつとあんまり寝ておられないんだな——
ここでできる限りゆっくりしていつて欲しいと願わずにいられなかつた。

その夜、清吉は残りの兵士たちを四月の時のように三、四人ずつに分け各家に配置した。その数は正確に数えることはできなかつたが、二百人はゆうに超えていたと思われる。余つた兵士たちを蔵や小屋に泊めた。若い娘たちも前と同じ三軒の家に集められた。四月の時と違つて、夜間に兵士たちは真つ暗な川で体を洗つたり、洗濯したりした。